

保育計画成果報告書

法人名等	特定非営利活動法人びーのびーの
施設名	ちいさなたね保育園
報告者（役職）	安江 文子（園長）
住所・連絡先	横浜市港北区師岡町 846-1
	☎ 045-515-0619
	E-mail jimukyoku@bi-no.org

○タイトル（保育計画）

こころとからだの開放と創造を～小さな庭に土、水、陽、風をください～

○主な助成備品

プール・砂場・目隠しフェンス等

1. 保育計画策定の目的

コロナ禍のため、散歩も儘ならなくなり、息をひそめて室内で保育をする日々があった。これでは子どもたちの育ちにいいことはない。こんな時だからこそ、こころも体も開放できる環境を作らなければ、こんな時だからこそ、自分たちで考え創造する楽しさを伝えなくてはと話し合い、何もなくても構わなかった園庭（小さな庭）にも土、砂、水を存分に使って、安心して遊べる空間を作ろうと計画をした。

【砂場】

- ・乳児にとっては、変幻自在で、日によって感触の違う砂遊びは、五感を育むもっとも重要な環境である。
- ・0, 1歳児は乾いた砂、湿った砂、どろどろの砂などの感触を知り、形が変わることを楽しむ。また、幼児にとっては感触遊びの上に、友達とのやりとりで、互いのおもいを重ね、形作り上げることのできる小さな宇宙である。
- ・2, 3歳児は砂という変化のある素材で、やりとり遊びや、形を作る楽しみを知る。
- ・4, 5歳児はイメージを広げ、共有し、一緒に作る楽しみを知る。

【プール】 ちいさなプール 2基 大きなプール 1基

水を体全部で感じ、思いっきり水の中で自分の体を使って遊ぶことで、心も体も心地よくなり、体力や技術まで体験から身に着ける。

- ・0、1 歳児 水の気持ちよさ感触を知り、安心して水に親しむ
- ・2、3 歳児 大きいプールに開放感を感じ、友達と全身で水と戯れることを楽しむ
- ・4、5 歳児 水の中でルールを知り、水の中で泳いだりもぐったりし遊ぶことで、水の性質を学ぶ

2. 具体的な実施内容

「プール」

命名！スフラッシュマウンテン（4 歳児のエピソードから）



保育士が子どもを抱っこしながら勢いよく回る遊び

保育士に支えられている安心感のもと、スピード感と、水しぶきを体感できるダイナミックな感覚、水の上をすべる面白さを体験できた。

はじめは濡れる事があまり好きではないと砂遊びや水遊びをしていた子も、友達のワクワクする歓声にそそられプールに引き寄せられていた。近くで見ると水しぶきがかかってしまうが、それもそんなに怖くないことに気が付いていた。

水のなかにごろーん（4 歳児エピソードから）



「気持ちいい。。。」

仰向けで青い空を見ながらつぶやいていた s 君。身体も大きくなった幼児にはおおきなプールで手足を伸ばしちょっと浮いている気分の心からの一言だ。s 君の顔を見れば一目瞭然だった。

揺れる水に体を任せる解放感と心地よさは羊水を思い出すような感覚なのではないか。

ゆったりとしたこの時間と経験を得られたのも、自園に大きなプールがあったからこそではないか。



回せ！回せ！（2歳児エピソードから）



小さいプールで水遊びをしていた時、保育士がプールを時計回りに何度もかき混ぜた。

水は時計回りに回りだし、浮いていたおもちゃが流れ始めた！

目の前にあったおもちゃが向こう側に流れていく様子にただただ見つめる子、おもちゃを追いかけて自分も時計回りをする子、保育士の真似をして水をかき混ぜだす子。。

おもちゃが流れるスピードが速くなるとともに、子どもたちの歓声も大きくなった。疲れてかき混ぜるのをやめると、おもちゃが動くのもだんだんゆっくりになる。

「止まっちゃう！！」全員がかき混ぜ始めた。

かき混ぜると水の流れが作れるのを知った瞬間だった。

全員がかき混ぜると流れのスピードと歓声は大きくなるが、疲れると止まっていく。何回かやっていたら、「なんでさわってないのに動くんだらうね？」とつぶやいていた子がいた。「なんでだらうね」と返したが、これが学びの入り口になるのかもしれない。

「砂場」

みんなで入ろう（1歳児エピソード）



「山を作ろう」と保育士が高い山を作っていた。高い山を作るほど、深い穴ができた。

「おふろ！」と穴に入った子。

自分もお風呂に入りたいと人数が増えていった。穴の砂は崩れて浅く大きくなっていく。そうすると、大浴場になり、みんなで足湯にはいることになった。

1歳児はまだ個々の遊びの世界にいるが、砂という形が変わる素材での遊びの中で、偶然からみんなで遊ぶ楽しさも知ることになった。

「フェンス」

フェンスがキャンパス（3，4歳児）



本来は目隠しのためのフェンスではあるが、感触遊びでもある塗りたくりを大胆にしてみようと、フェンスに大きな紙を貼り、手に絵の具を付けて全身で描いてみた。園庭なので、どんなに汚れても大丈夫。白い紙に好きな色に手を染めて気持ちをぶつける。

そーっと塗る子やスタンプのように手形を押す子、何かを描いている子。

想いはさまざまに形にされ、一つになって、思いの強さに紙の形をも変えたが、子どもたちのエネルギーを感じさせる芸術になっていた。

3. その成果と評価

コロナ禍の中、地域の公園で遊ぶのも気が引けるときもあつたり、ダイナミックさに欠けたりすることもあつたが、園庭に砂場ができたことで、いつでも自由に関われる自然の素材の安心と心地よさや遊びの広がりを得ることができた。

新入園児などは、砂を手で触ることはもちろん、裸足で園庭の砂場に下り、初めての感覚に戸惑って動けなくなる子どもや、くすぐったくて笑い声を上げながらゆっくり歩く子どももいた。

乳児期は特に五感を育てる遊びを重要視しているため、園庭にある砂場で、手や足、身体中から刺激を感じ、たくさんの初めての経験ができた。

幼児も園庭にある砂場ということで、心行くまで遊び、明日に継続した遊びの展開を楽しみにしていた。

ちいさな園庭の砂場、プールではあるが、エピソードでもわかるように、心地良さ、自分の関わりや道具を使うことで変化が起こる素材の面白さ、その共有からの人間関係など、さまざまなドラマと学びが繰り返されていた。

今、目の前にいる子どもたちに必要な環境として、私たちは「室外」「安心」「思う存分」「解放感」を熱望していた。

今回の計画により、大きな成果があつたことは間違いない。

4. 今後の課題と展望

*フェンス

本来はプール遊びのための目隠しだったフェンスだが、大胆な芸術遊びの格好のキャンバスになったのは、保育士の柔らかい発想と子どもたちのエネルギーだった。そこから、「青空展覧会」を開催して、子どもたちの芸術をフェンス展示しようという話まで出ている。ただの目隠しだけでは終わらせないしなやかな発案と実行力を育てるきっかけになったと信じている。

*砂場

園庭の土を掘り返し、泥と、砂の違いを感じたり、砂場に水を流し込み、染みていく様子や、園庭に溝を掘り、川を作ろうとしたりという姿があり、「土」という素材も手元に欲しいと考えている。安全で扱いやすい砂を十分に遊んだら子どもたちは何を試そうとするのかを観察し、環境を探していきたい。

*プール

今回のことがきっかけで水遊びの意義も話し合い、「室外」「安心」「思う存分」「解放感」を経験できるのはプール遊びが欠かせないという結論になった。友達と一緒に挑戦できた姿や水の反射から光遊びに発展したクラスもあり、自然物に全身で関わることで知る経験は深い学びにつながった。

以上